

ある種の $P_2(\mathbb{C})$ の分歧被覆

東京都立大学 福井 敏純

(Toshisumi Fukui)

$P_2(\mathbb{C})$ を複素射影平面, $B \subset P_2(\mathbb{C})$ を平面被約曲線とする。

定義 正規曲面 X が B で分歧する $P_2(\mathbb{C})$ の有限被覆であるとは、次が成り立つこと

- (i) 全射有限正則写像 $\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ が存在して
- (ii) $X_0 = \pi^{-1}(P_2(\mathbb{C}) - B)$ とおくとき、制限写像 $\pi|_{X_0}: X_0 \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ が不分岐被覆

このとき $\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を被覆写像とする。

定義 $\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を被覆写像とする。
 $\forall x \in X$ に対して 分岐指數 $b(x)$ を次で定義する。
 V を $f(x)$ の十分小さい近傍、 U を x を含む $f^{-1}(V)$ の連結成分とするとき

$$b(x) := \#\{\pi^{-1}(y) \mid y \in V - B\} \cap U$$

このとき、直ちに次が従う。

$$b(x) > 1 \implies f(x) \in B$$

以後 $\pi|_{X_0} : X_0 \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ の被覆変換群 G が、
 X に複素同型群として、次の可換四式をみにすように
 作用していようと仮定する。

$$\begin{array}{ccc} G \times X_0 & \longrightarrow & X_0 \\ \downarrow id_{X_0} \circ \iota & & \downarrow \iota \\ G \times X & \longrightarrow & X \quad (\iota : X_0 \rightarrow X \text{ は包含写像}) \end{array}$$

このとき次のような問題を考えよう。

" $P_2(\mathbb{C})$ の B で分岐する有限被覆 X の特異点解消
 \tilde{X} の曲面としての構造 (小平次元, コホモロジー群等)
 と 曲線 B の構造 (既約成分の個数, その次数, 種数 及
 び特異点) の間の関係を見つけること"。

本稿では、ある特別な場合にこの問題の答えを出すことを目的とする。

少し記号を準備する。

$\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を 有限分歧被覆.

$B \subset P_2(\mathbb{C})$ を π の分歧軌跡.

$p: \tilde{X} \rightarrow X$ を 最小特異点解消.

$R = (\pi \circ p)^{-1}(B)_{\text{red.}}$ とする.

$B = B_1 + \dots + B_s$ を既約分解.

$\text{Sing } B = \{P_1, \dots, P_l\}$

$E_i = (\pi \circ p)^{-1}(P_i)_{\text{red.}} \quad (i=1, \dots, l)$

$E_i = E_{i,1} + \dots + E_{i,r_i}$ を既約分解.

$\overline{R - E_1 - \dots - E_l}$ と $(\pi \circ p)^{-1}(B_j)_{\text{red.}}$ の共通成分を

$R_j, R_j = R_{j,1} + \dots + R_{j,r_j}$ をその既約分解とする.

このとき

$$R = R_1 + \dots + R_s + E_1 + \dots + E_l$$

$$= R_{1,1} + \dots + R_{1,r_1} + \dots + R_{s,1} + \dots + R_{s,r_s} + E_{1,1} + \dots + E_{1,r_1} + \dots + E_{l,1} \\ + \dots + E_{l,r_l} \quad (\text{既約分解})$$

$x \in X$ の等方部分群 $G_x = \{g \in G \mid g \cdot x = x\}$

とするとき X の因子 D に対して generic な $x \in D$ に対しては G_x は同型だからその群を G_D と書くことにする.

命題A X への群 G の作用は \tilde{X} へ拡張できる.

→ 次の可換図式をみたす. 群 G の曲面 \tilde{X} への作用が存在する.

$$G \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}$$

$\downarrow \text{id}_{\tilde{X}} p$ $\downarrow p$

$$G \times X \rightarrow X$$

証明 $\forall g \in G$ に対して合成写像

$$\tilde{X} \xrightarrow{p} X \xrightarrow{g} X$$

\tilde{X} は非特異で $g \circ p$ は固有写像だから

$g \circ p : \tilde{X} \rightarrow X$ は X の特異点解消である。

\tilde{X} は正規曲面 X の最小特異点解消だから

$$\exists \tilde{g} : \tilde{X} \rightarrow \tilde{X} \quad \text{s.t. } p \circ \tilde{g} = g \circ p$$

よって 群 G は \tilde{X} 上の作用に拡張される。 \square

以後、曲面 \tilde{X} に次の条件を仮定する。

$$\textcircled{1} \quad H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) \neq 0$$

$$\textcircled{2} \quad \wedge^2 H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) = 0$$

条件①②をみたす曲面の例

イ) \tilde{X} が非有理線織曲面に双有理同値などとき

ロ) \tilde{X} が超橋円曲面に双有理同値などとき

条件①②をみたせば Albanese 写像

$$\theta : \tilde{X} \rightarrow \text{Alb}(\tilde{X}) = H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1)^*/H_1(\tilde{X}, \mathbb{Z})$$

の像 は 1 次元である。

$\theta(\tilde{X})$ の正规化を Γ とおくと, fibering.

$$\theta: \tilde{X} \rightarrow \Gamma$$

が存在する。

$\theta(\tilde{X})$ が1次元であるから, \tilde{X} 上の任意の1形式 ω を $\theta: \tilde{X} \rightarrow \Gamma$ の fibre F 上に制限すると恒等的に 0 に等しい。

命題B 群 G の曲面 \tilde{X} への作用は, fibering $\theta: \tilde{X} \rightarrow \Gamma$ を保つ。即ち

$$\forall g \in G, \forall y \in \Gamma, \exists y' \in \Gamma \text{ s.t. } g(\theta^{-1}(y)) = \theta^{-1}(y')$$

証明.

固有写像定理より $g(\theta^{-1}(y))$ は1点又は Γ であるから $g(\theta^{-1}(y)) = \Gamma$ として矛盾を導く。

η を Γ 上の 0 でない 1 形式とする。すると $(\theta \circ g)^* \eta$ は X 上の 1 形式で $\theta^{-1}(y)$ 上 0 でない。これは矛盾。□

従って 群 G は曲線 Γ に作用している。

$$G \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}$$

$$\downarrow \text{id} \times \theta. \quad \downarrow \theta$$

$$G \times \Gamma \rightarrow \Gamma$$

$$N = \{g \in G \mid g \cdot y = y \quad \forall y \in \Gamma\}$$

とおくと、 N は G の正規部分群である。

$$\text{命題C } G_{R_{ij}} \not\subset N \iff \exists y \in \Gamma, \text{s.t. } R_{ij} \subset \theta^{-1}(y)$$

証明. F を $\theta: X \rightarrow \Gamma$ の general fiber とする。

$$F \text{ は generic だから } R_{ij} \cdot F \geq 0.$$

$$R_{ij} \cdot F > 0 \text{ と仮定する。}$$

$$\exists z \in R_{ij} \cap F.$$

$$G_{R_{ij}} \not\subset N \text{ より } \exists g \in G_{R_{ij}}, g \notin N.$$

$$z \in R_{ij} \text{ より } g(z) = z$$

$$g \notin N \text{ より } g(z) \notin F$$

$$\text{これは } z \in R_{ij} \cap F \text{ に矛盾 よって } R_{ij} \cdot F = 0.$$

$$R_{ij} \text{ は既約だから } \exists y \in \Gamma, R_{ij} \subset \theta^{-1}(y) \quad \square$$

同様にして、 $\theta: X \rightarrow \Gamma$ の fiber F に対して

命題D $G_{R_{ij}} \subset N$ のとき

$$R_{ij} \cdot F = 0 \iff \exists y \in \Gamma, \text{s.t. } R_{ij} \subset \theta^{-1}(y)$$

命題 $\exists P_2(\mathbb{C})$ の曲線族 $\Lambda = \{ \pi \circ \rho \circ \theta^{-1}(y) \mid y \in \Gamma \}$

は、線型束 (linear pencil) をなす。

証明.

$P_2(\mathbb{C})$ 上の general line の $\pi \circ \rho$ による引き戻しを H とする。 H の genericity より $\theta(H) = \Gamma$ 。
 G の作用は H を保つから 写像

$$H/G \rightarrow \Gamma/G$$

が定義される。 $H/G \cong P_1(\mathbb{C})$ より $\Gamma/G \cong P_1(\mathbb{C})$ よって 曲線族 Λ は $P_1(\mathbb{C})$ で parametrize される。

因子 H は 写像 $\pi \circ \rho: \tilde{X} \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を定義するから
 Λ の元は $a = H \cdot \theta^{-1}(y)$ 次の曲線である。

$$Y = \tilde{X}/G \text{ とかく。}$$

$\bar{\theta}: Y \rightarrow \Gamma/G = P_1(\mathbb{C})$ は全射である。

$\phi: \tilde{Y} \rightarrow Y$ を特異点解消。

$\tilde{Y} \xrightarrow{\phi} Y \xrightarrow{\bar{\theta}} \Gamma/G = P_1(\mathbb{C})$ の合成写像を $\gamma: \tilde{Y} \rightarrow P_1(\mathbb{C})$

$\tilde{Y} \xrightarrow{\phi} Y = \tilde{X}/G \rightarrow X/G \cong P_2(\mathbb{C})$ の合成写像を

$$\sigma: \tilde{Y} \rightarrow P_2(\mathbb{C}) \text{ とかく。}$$

$\sigma: \tilde{Y} \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ は 双有理正則写像だから。

$\sigma: \tilde{Y} \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ は 有限回の blow-up の合成でかける。

E を $\sigma: \tilde{Y} \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ の例外集合, $E = \sum_{i=1}^r E_i$ を

既約分解とするとき、整数 e_1, \dots, e_n が存在して、

$$\gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)}(1) = \sigma^* \mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha) \otimes \mathcal{O}_{\tilde{Y}}\left(\sum_{i=1}^n e_i E_i\right)$$

とかける。よって

$$\begin{aligned}\sigma_* \gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)}(1) &= \sigma_* \sigma^* \mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha) \otimes \sigma_* \mathcal{O}_{\tilde{Y}}\left(\sum_{i=1}^n e_i E_i\right) \\ &= \mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha) \otimes \sigma_* \mathcal{O}_{\tilde{Y}}\left(\sum_{i=1}^n e_i E_i\right)\end{aligned}$$

十分小さな $P_2(C)$ の開集合 U に対して、

$$\begin{aligned}\Gamma(U, \sigma_* \mathcal{O}_{\tilde{Y}}(\sum e_i E_i)) &= \Gamma(\sigma^{-1}(U), \mathcal{O}_{\tilde{Y}}(\sum e_i E_i)) \\ &\hookrightarrow \Gamma(\sigma^{-1}(U) - \varepsilon, \mathcal{O}_{\tilde{Y}}(\sum e_i E_i)) \quad (\text{制限写像}) \\ &\hookrightarrow \Gamma(\sigma^{-1}(U) - \varepsilon, \mathcal{O}_{\tilde{Y}}) \\ &\simeq \Gamma(U - \sigma(\varepsilon), \mathcal{O}_{P_2(C)}) \\ &\simeq \Gamma(U, \mathcal{O}_{P_2(C)}) \quad (\because \text{Hartogs の拡張定理})\end{aligned}$$

だから

$$\sigma_* \mathcal{O}_{\tilde{Y}}(\sum e_i E_i) \hookrightarrow \mathcal{O}_{P_2(C)}.$$

従って

$$\sigma_* \gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)}(1) \xhookrightarrow{\iota} \mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha) \quad \text{を得る。}$$

よって、 $(\iota^*: H^0(\sigma_* \gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)})) \rightarrow H^0(\mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha))$ が準射。

$$\text{i.e. } \iota^*: H^0(\tilde{Y}, \gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)}(1)) \hookrightarrow H^0(\mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha))$$

$$\text{一方 } \gamma^*: H^0(P_1(C), \mathcal{O}_{P_1(C)}(1)) \hookrightarrow H^0(\tilde{Y}, \gamma^* \mathcal{O}_{P_1(C)}(1))$$

$$\text{より } (\iota^* \circ \gamma^*: H^0(P_1(C), \mathcal{O}_{P_1(C)}(1)) \hookrightarrow H^0(P_2(C), \mathcal{O}_{P_2(C)}(\alpha)))$$

写像の構成法より $\Lambda = P(\iota^* \circ \gamma^*(H^0(P_1(C), \mathcal{O}_{P_1(C)}(1))))$

よって $\Lambda \hookrightarrow \mathbb{P}(H^0(P_2(\mathbb{C}), \mathcal{O}_{P_2(\mathbb{C})}(a)))$

従って Λ は線型系である。 \square

定義 X が $P_2(\mathbb{C})$ の n 次巡回被覆であるとは、

(i) 被覆変換群 G が $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ に同型である。

(ii) 分岐曲線 B の generic 点 ∞ の逆像における等方部分群が $G = \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ に同型

のときとする。

$\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ が n 次巡回被覆, $p: \tilde{X} \rightarrow X$ を特異点解消とするとき、次が成り立つ。

定理'

(i) \tilde{X} が非有理線緯曲面に双有理同値なら次の条件をみたす線型束 (pencil) $\underline{\Lambda}$ が存在する。

イ) Λ の generic な元は既約有理曲線。

ロ) $\exists D_1, \dots, D_t \in \Lambda$ s.t. $B \subset D_1 \cup \dots \cup D_t$

ハ) $w_i: P_i \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を Λ の各底点 ∞ の blow-up

Λ_1 を Λ の w_1 による固有像のつくる線型束とする。帰納的に $w_j: P_{j+1} \rightarrow P_j$ を Λ_j の各底点 ∞ の blow-up, Λ_{j+1} を Λ_j の固有像のつくる線型束とする。 Λ_k を底点自由, $w = w_1 \circ \dots \circ w_k$ とする。

$\omega^*B = \sum e_i E'_i + B'$ (但し B' は ω による固有像, E'_i を $\omega: P_k \rightarrow P_2(C)$ の例外集合の各既約因子) と書いたとき, $D \in \Gamma$ に対して

$$D \cdot E'_i \neq 0 \Rightarrow m|e_i$$

(ii) 逆に 1) (i), (ii) を満たすような線型束 Λ が存在するような B を分岐する $P_2(C)$ の n 次巡回被覆の特異点解消は線織曲面に双有理同値である。

証明

(i) \tilde{X} は非有理線織曲面に双有理同値だから 代数曲線 Γ と 写像 $\gamma: \tilde{X} \rightarrow \Gamma$ が 存在して γ の general fibre は $P_1(C)$ に同形。

命題Aより 巡回群 $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は曲面 \tilde{X} に作用し、更に、

命題Bより 巡回群 $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は曲線 Γ にも作用している。

群 $N = \{g \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z} \mid g \cdot y = y \quad \forall y \in \Gamma\}$

は $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ の真部分群である。

$\therefore N = \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ とすると $\tilde{X}/G \xrightarrow{\bar{\gamma}} \Gamma$ が well-defined。 \tilde{X}/G は $P_2(C)$ に双有理同値。

一方 genus $\Gamma \geq 1$ これは矛盾。

3頁の記号の下で、各 R_j は X の既約因子。 X が $P_2(C)$

の巡回被覆. たゞか $\mathcal{G}_{R_j} = \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, (\nu_j)$.

よって命題C より R_j は. $p: \tilde{X} \rightarrow \Gamma$ の fibre に属す.

$\Lambda = \{\pi \circ p \circ p^{-1}(y) \mid y \in \Gamma\}$ とおくと. 命題E より

Λ は $P_2(C)$ の線型束で条件1) (ii) をみたす.

$\pi \circ p|_{R_j}: R_j \rightarrow B_j$ の写像度は 1 たゞか.

$\pi \circ p|_{p^{-1}(y)}: p^{-1}(y) \rightarrow \pi \circ p \circ p^{-1}(y)$ の写像度も 1.

従って群 N は単位群である.

$\hat{X} = P_k \times_{P_2(C)} \tilde{X}$ (fibre 積) とおくと. generic な

$D \in \Lambda_k$ の $\pi \circ p$ による逆像は. n 個の $P_1(C)$ の disjoint

和になる. 一方 E' 上の generic な点の近傍上の $\tilde{X} \times_{P_2(C)} P_k$

の局所座標環は $\mathbb{C}\{x, y, z\}/(z^n - x^e)$ に 同型 たゞか.

D の $\pi \circ p$ による逆像が m 個の disjoint $P_1(C)$ であるためには m/e でなければならぬ.

(ii) i) ~ vi) をみたす線型束が存在したとする.

Λ_k は底点自由たゞか.

写像 $\varphi: P_k \rightarrow P_1(C)$ が well-defined

条件 ii) より general な $D \in \Lambda_k$ の $\tilde{X} \times_{P_2(C)} \tilde{\pi} \rightarrow P_k$

による逆像は. n 個の disjoint $P_1(C)$.

$\Gamma = \{D_{i,j} \mid D_{1,j} + \dots + D_{n,j} \in \tilde{\pi}^{-1}\Lambda_k, \lambda \in P_1(C)\}$

とおくと $\Gamma \rightarrow P_1(C)$ は n 重被覆で. 線型系 $\tilde{\pi}^{-1}\Lambda_k$

が定義する写像。重: $\tilde{X} \times P_k \rightarrow \Gamma_{P_2(C)}$ general fibre は
非特異 $P_2(C)$ に同形。よって $\tilde{X} \times_{P_2(C)} P_k$ は線織曲面
に双有理同値。□

注) P.4 の条件①②をみたす又につけた同様の事実が成立。

条件二) を次のようく定義する。

二) 記号 $\omega: P_k \rightarrow P_2(C)$, E' 等は i) と同様とする。

$D \in \mathcal{L}_k$ に対して

$$2n - \sum (m - (n, e_i)) D \cdot E'_i = 0 \quad \text{が成り立つ。}$$

このとき iii) の証明と同様にして、次が証明できる。

"条件 i) ii) をみたす線型束 \mathcal{L} が存在するような B で分歧するような巡回重被覆の特異点解消は橋円曲面に双有理同値である。"

命題 F.

$B \subset P_2(C)$ で分歧する $P_2(C)$ の 2 重被覆の特異点解消を \tilde{X} とする。このとき

$$H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) \neq 0 \Rightarrow \wedge^2 H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) = 0$$

証明 g を被覆変換群 $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ の生成元とする。

$\eta \in H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1)$, $\eta \neq 0$ とすると

$$g^* \eta = \eta \quad \text{又は} \quad g^* \eta = -\eta$$

$g^*\eta = \eta$ とすると η は $\tilde{X}/\mathbb{Z}_{2\mathbb{Z}}$ 上の 1 形式を定義するが。 $\tilde{X}/\mathbb{Z}_{2\mathbb{Z}}$ は有理曲面と双有理同値だから $\eta \equiv 0$ となる。よって $\eta \neq 0$ なら $g^*\eta = -\eta$ 。
 $\omega_1, \omega_2 \in H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1)$ に対して $(\omega_1 \neq 0, \omega_2 \neq 0)$
 $g^*(\omega_1 \wedge \omega_2) = g^*\omega_1 \wedge g^*\omega_2 = (-\omega_1) \wedge (-\omega_2) = \omega_1 \wedge \omega_2$ 。
よって $\omega_1 \wedge \omega_2$ は $\tilde{X}/\mathbb{Z}_{2\mathbb{Z}}$ 上の 2 形式を定義する。
 $\tilde{X}/\mathbb{Z}_{2\mathbb{Z}}$ は有理曲面に双有理同値だから $\omega_1 \wedge \omega_2 \equiv 0$ 。
 $\omega_1 \wedge \omega_2 \equiv 0$. □

命題 F と定理の証明を合わせると次の系を得る。

系 (de Franchis)

$\pi: X \rightarrow P_2(\mathbb{C})$ を B で分歧する 2 重被覆

$P: \tilde{X} \rightarrow X$ を特異点解消とする。

$H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) \neq 0$ ならば、線型束 Λ が存在して、

$\exists D_1, \dots, D_t \in \Lambda \quad s.t. \quad B \subset D_1 \cup \dots \cup D_t$.

$$\text{ここで } t \geq 2 \dim_{\mathbb{C}} H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1) + 2.$$

記号 $q := \dim_{\mathbb{C}} H^0(\tilde{X}, \Omega_{\tilde{X}}^1)$.

例 1. $\Lambda = \{1 \text{ 点を通る直線のなす線型束}\}$ のとき

$\forall D_1, \dots, D_{nd} \in \Lambda \quad (D_i \neq D_j \vee i \neq j)$

$B = D_1 \cup \dots \cup D_{nd}$ で分歧する $P_2(\mathbb{C})$ の巡回被覆 X を

つくると、 X は、 $g = \frac{1}{2}(n-1)(nd-2)$ の線緯曲面になる。

例2.

△が2次曲線のなす線型束のとき、infinitesimal near points \in

$B_S \Delta = \{P_1, P_2, P_3, P_4\}$ とする

$\pi_1: P_1 \rightarrow P_2(C)$ を P_1 中心の blow up. $E_1 = \pi_1^{-1}(P_2)$

$\pi_i: P_i \rightarrow P_{i-1}$ ($i=2, 3, 4$) を P_i 中心の blow up $E_i = \pi_i^{-1}(P_{i-1})$

とする。△は次の5通りある。

1) $P_2 \notin E_1, P_3 \in E_2, P_4 \in E_3$

2) $P_2 \in E_1, P_3 \in E_2, P_4 \notin E_i$ ($i=1, 2, 3$)

3) $P_2 \in E_1, P_3 \notin E_1 \cup E_2, P_4 \in E_3$

4) $P_2 \in E_1, E_1 \cup E_2, E_3, E_4$ は disjoint.

5) E_1, E_2, E_3, E_4 は互いに disjoint.

$D_1, \dots, D_t \in \Delta$ に対して、 $B = D_1 \cup \dots \cup D_t$ で分岐する

n 重巡回被覆 X をつくる。このとき、Hurwitz の方法により

$$1) \Rightarrow g = \dim_{\mathbb{C}} H^0(X, \Omega_X^1) = \frac{1}{2}(n-1)(t-2) - \frac{1}{2}(n-(n, 3t))$$

$$2) \Rightarrow g = \frac{1}{2}((n, t)-1)(t-2)$$

$$3) \Rightarrow g = \frac{1}{2}(n-1)(t-2) - \frac{1}{2}(n-(n, t))$$

$$4) \Rightarrow g = \frac{1}{2}((n, t)-1)(t-2)$$

$$5) \Rightarrow g = \frac{1}{2}((n, t)-1)(t-2)$$

が成立ることがわかる。

このようにて3次曲線, 4次曲線, …の線型束につけても
4負の条件①②をみたす巡回被覆を“くじく”も構成でき,
その不正則数 ρ も計算可能である。

以上

参考文献

O. Zariski

"Algebraic Surfaces." 2nd suppl. ed., Ergebnisse 61
Springer-Verlag, Heidelberg (1971)